

サラエボの花

2007(平成19)年11月5日鑑賞〈GAGA 試写室〉

★★★★



監督・脚本＝ヤスマラ・ジュバニッチ／出演＝ミリャナ・カラノヴィッチ／ルナ・ミヨヴィッチ／レオン・ルチェフ／ケナン・チャティチ（アルバトロス・フィルム、ツイン配給／2006年ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、オーストリア、ドイツ、クロアチア映画／95分）

……えらく美しいタイトルの映画だが、誤解してはダメ。サラエボ紛争の中、主人公の身に起きた集団レイプのおぞましさは……？ そのうえ、妊娠・出産ともなれば、その苦悩は……？ 島国ニッポンに安住し、中東問題も東欧問題も他人ゴトとして関心を示さない日本人たちは、たまにはこんな映画を観て、ベルリン国際映画祭金熊賞受賞の意味を考えながら、勉強する必要があるのでは……？

サラエボはどこ国……？

昔からバルカン半島は紛争の火種になっているところだが、第2次世界大戦終了後ヨーロッパ最悪の紛争になったのが、1992年に旧ユーゴスラビアが解体していく中で勃発したボスニア紛争。そして、東をセルビアに、南をモンテネグロに、そして北と西をクロアチアに囲まれた国ボスニア・ヘルツェゴヴィナの首都がサラエボだ。

ボスニア紛争は、1995年に一応の決着をみるまでに死者20万人、難民、避難民200万人が発生したといわれているが、この映画の主人公エスマ（ミリャナ・カラノヴィッチ）もその被害者の1人。

2006年の第56回ベルリン国際映画祭の結果は……？

三大映画祭の1つであるベルリン国際映画祭は毎年2月中旬に開催されるから、日本的な「年度」の感覚でいえば、カンヌの5月、ベネチアの8月末から9月初旬に比べると最後の時期となる舞台。

2006年の第56回ベルリン映画祭のコンペティション部門には日本映画は入ってい

なかったが、パノラマ部門で三池崇史監督の『46億年の恋』（06年）と SABU の『疾走』（05年）が上映された。この『疾走』はいい映画で、私は星5つをつけた（『シネマールーム10』247頁参照）が、『46億年の恋』は全然理解できず私の評価は星2つだった（『シネマールーム12』299頁参照）。

コンペティション部門では、長編19本、短編10本が上映された中で、見事金熊賞を射とめたのがこの『サラエボの花』。ちなみに、私が2007年7月19日に観た『オフサイド・ガールズ』（06年）は、この時の審査員グランプリの受賞作。そんな最高の荣誉に輝いた作品を、1年9カ月遅れでやっと観ることに……。

シャヒードとは……？

『サラエボの花』は、「愛についての映画である」とされている。この映画の主人公エスマは一人娘のサラ（ルナ・ミヨヴィッチ）と2人で暮らしているが、サラには父親はいない。娘は今12歳。それくらいの年頃になれば、自分の父親が誰なのかについて関心をもつのは当然だが、そんな娘からの質問に対するエスマの答えは、「お父さんはシャヒードだ」ということのみ。シャヒードとは殉教者、つまりボスニア紛争の際、サラエボはセルビア人勢力に包囲され制圧されていたから、サラエボ市民の中に多くの殉教者が出たのは当然。

そのセルビア紛争が収まり、平和を取り戻した今、サラが通う学校では、父親がシャヒードとなった家庭はその証明書を提出すれば、修学旅行のための費用である200ユーロが免除されるらしい。そのため、サラは父親がシャヒードであることの証明書をエスマに求めたが、エスマはなぜかそれをなかなか提出しない。その挙げ句、エスマは証明書に代えて200ユーロを用意したから、サラのエスマに対する不信は爆発寸前状態に……？

「ねえ、私の父親は誰……？」「シャヒードの証明書は……？」。それは、サラにとって子供心に自分の尊厳を保つための必死の問いかけだったのだが……？

グルバヴィツァ地区とは……？

今エスマとサラが住んでいるアパートはグルバヴィツァ地区にあるらしい。ネット情報によれば、このグルバヴィツァ地区はサラエボ市内の中心地に一番近い最前線であり、かつセルビア人勢力の軍事拠点だったため、「サラエボ包囲」作戦におい

で最激戦地区になったらしい。そして、セルビア人勢力からこのグルバヴィッツァ地区が返還されたことをもって、やっとサラエボは統合されたとのこと。

私たち日本人にとっては、ボスニア紛争そのものがほとんどわかっていないから、このグルバヴィッツァ地区の悲劇も全然知らない人が多いはず。したがって、私たち日本人がベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞したこの映画を観るべきなのは、何よりも勉強のため。11月5日の朝刊にみるとおり、小沢民主党代表の辞任表明によって日本の政界は大揺れに揺れているが、これはあくまで日本国内における民主主義的ルールにおける政治闘争、権力闘争にすぎないもの。それに比べれば、このボスニア紛争のすさまじさは……？ 開かれた日本、世界に目を向けた日本人となるためには、こんな映画をきちんと観て世界の動きとりわけバルカン半島の動きを勉強することが不可欠……。

サミルの存在と揺れ動くサラの心は……？

この映画にはサラの同級生の男の子サミル（ケナン・チャティチ）が登場し、サラの揺れ動く心に大きな影響を与える役割を果たしている。最初のシーンでは、サミルはサラの敵対勢力。それはつまり、女の子のクセにサッカーが上手なサラに対してサミルが嫉妬していたため……？

しかし、サラがシャヒードの遺児だと知ったサミルは、自分もボスニア紛争で父親を亡くしていたため、共通の喪失感から次第に2人は急接近していくことに……。そして、12歳ながら性的発育の早い今ドキの子供たちはいつしか男女の仲に……？

私の時代では12歳といえばまだ子供だったが、今ドキの12歳はそれぞれ自分の生き方を定めていくべき年齢……？ サミルとの仲を急速に深めていき、サミルから拳銃まで手に入れたサラは、ある日「私の父親は誰なの！」と拳銃を突きつけながら、母親のエスマに迫ったが……。

ペルダの役割は微妙……？

この映画ではサラに影響を与える同級生の少年サミルと同じように、エスマに影響を与える男ペルダ（レオン・ルチェフ）が登場する。ペルダはナイトクラブで働く男で「雑用係」と自称しているが、どうもその実態は用心棒のような役割……？ そんなペルダがナイトクラブで大勢いる魅力的な女性ではなく、ウェイトレスのおばさん

であるエスマに興味を示してきたが、それは一体なぜ……？ ペルダの言葉によると、それは「どこかで会ったことがある」かららしいが、その真偽のほどは……？ 最初はそんな風に近づいてくるペルダを警戒していたエスマだったが、ペルダもボスニア紛争で父親を亡くし、「その遺体確認の際に会ったのではないか」と言われ、互いの境遇を語り合うようになると、次第に2人の距離は縮まっていくことに……。

そんなある日、ナイトクラブのオーナーがちょっとしたイザコザでエスマに対して因縁をつけ始めた時、ペルダは自分の雇い主であるこのオーナーに対して反旗を翻してエスマを守ったから、問題が大きくなることに……。さて、ペルダにはこの後どんな運命が待ちうけているのだろうか……？

ちなみに、私の目にはこの映画の中でペルダがエスマに対してどんな役割を果たすのかについてはかなり中途半端に思えたから、ペルダという人物をなぜこのような役割で登場させたのかは微妙なところ……？

セラピーの場で語られる真実は……？

娘のサラから「私の父親は誰……？」と拳銃を突きつけながら迫られたエスマは、ついにサラとつかみ合いのケンカになりながら、「あなたはレイプされた結果生まれたきた子供だ！ 私生児だ！」と告白した。自分の父親はシャヒードだと信じていたサラにとって、それが大ショックだったことは当然。それを聞いたサラは、修学旅行を目前にして、頭を丸刈りに……。そんな娘に対する告白を前提として、エスマがセラピーの場で泣きながらはじめて自分の過去を告白するシーンが、この映画のクライマックス。そこでエスマは正直に、収容所で敵の兵士にレイプされて身ごもったこと、その子供の存在が許せず流産させようとおなかを叩き続けたこと、そして生まれた子供を腕に抱いたとき、「こんなに美しいものがこの世の中にあることを忘れていた」と思ったということを語ったが、このシーンこそ第56回ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞することになった由縁……。

こんな強さは一体どこから……？

エスマの生計は、政府が出してくれるわずかの生活補助金と裁縫で得るわずかの収入だけ。それだけでは生活が苦しいから、エスマは子供がいることを隠してナイトクラブでウェイトレスとして働いている。そこで、夜だけはサラの面倒を見てもらうた

めに親友に来てもらっているが、12歳という年頃の女の子は何かと反発しがち……。

エスマの家庭内での教育方針を見ていると、今ドキの日本とは大違いで、かなり強権的だし時としては手を出すことも……？ シャヒードの証明書をなかなか出してくれないことと相まって、サラの反発心、反抗心は次第に大きくなっているようだが、果たしてこのままで大丈夫……？ 昨今のヤワな日本の教育事情と対比しながら、思わずそんな心配をしてしまったが、さすがサラエボの女の子は百戦錬磨……？ ちょっとやそっとのことではへこたれない心の強さをもっていることが、この映画を観ているとよくわかる。

この映画の感動的なシーンは2つあり、1つは前述のエスマの告白シーン。そしてもう1つは、エスマからショッキングな告白を聞いた後のサラの行動。いきなり頭をバリカンで丸坊主にしたのは驚いたが、修学旅行に出発する日の、何ともいえない母と娘の対立と和解は感動的……。

こんなシーンが表現できたのは、結局エスマもサラも共に心が強いため。そう理解することができれば、日本の若い母親や娘も、家庭環境や教育環境の問題だと逃げず、エスマとサラのように真正面から困難に立ち向かわなければ……。

2007(平成19)年11月6日記